

悪霊 第六部・貧民窟の聖女

悪
霊

第
六
部
・
貧
民
窟
の
聖
女<sup>マ
リ
ア</sup>

【登場人物】

- 伊集院満枝……………北海道日市の地主の娘。川奈産業の大株主
安西小百合……………満枝とはI高等女学校の一年後輩。夫を上海で亡くす。
猪俣佐和子……………党员。党の名前は井上。伊集院満枝の元クラスメイト
李麗姫……………元女性抗日パルチザン。満枝の仲間になる
佳代……………貧しい農家の娘。党のハウスキーパー
金沢文子……………安藤の養女
海老沼千恵子……………家出した資産家の娘。佐和子の配下となる
篠原ヨシ……………伊集院家の使用人
小沼健吾……………元伊集院家の小作人。
安西健吉……………小百合の兄
安西信子……………小百合の母
増田喬……………小百合の夫。川奈産業社員。上海で事故死
磯田アヤノ……………小百合の叔母。華道の師範
磯田幸吉……………小百合の叔母の夫。高等小学校教師
磯田悦子……………東京に家出して小百合に救われ、磯田夫妻の養女になる
老人……………右翼の大物
黒木……………小沼と同じ国家主義団体のメンバー
大橋多喜蔵……………プロレタリア作家。党员。佳代と同居する。

- 三沢……………党中央委員。特高警察のスパイ
手塚……………「党」の戦闘的技術団メンバー。佐和子の直属の上司
安藤浄海……………元左翼の弁護士貧民街の僧
朴正烈……………朝鮮人青年
曾根……………党员

【時・場所】

昭和七年（一九三二）五月～八月。北海道日市、青森県弘前市、東京市、熱海

日本国民よ！

刻下の祖国日本を直視せよ、政治、外交、経済、教育、思想、軍事、何処に皇国日本の姿ありや。

政権党利に盲いたる政党と、之に結托して民衆の膏血を搾る財閥と、さらに之を擁護して
 内政日に長ずる官憲と、軟弱外交と、墮落せる教育と、腐敗せる軍部と、悪化せる思想と、
 塗炭に苦しむ農民、労働者階級と而して群衆する口舌の徒と……

日本は今やかくの如き錯綜せる墮落の淵に死なんとしている。革新の時機！ 今にして立
 たずんば日本は滅亡せんのみ。

国民よ！ 武器を執つて立て、今や邦家救済の道は唯一つ、直接行動以外に何者もない。

なんだかそっくり……。

ガリ版を切る手を休め、朝刊を手にした佳代は、口のなかで呟いた。

すぐる五月十五日、犬養毅首相を暗殺した海軍軍人たちがばら撒いた檄文が、新聞に掲載され
 た。その文言が、佳代が「党」の命令で作っているビラの文句によく似ているのだ。

檄文はさらに続く。

国民の敵たる既成政党と財閥を殺せ！

横暴極まる官憲を膺懲せよ！

奸賊、特権階級を抹殺せよ！

農民よ、労働者よ、全国民よ祖国日本を守れ！

まず破壊だ！

凡ての現存する醜悪なる制度をぶち壊せ！

プロレタリア作家の大橋多喜蔵と、目黒にある二階建ての家で暮らすようになって二年近く。
 佳代は、ひたすら「党」の命ずるままにガリ版を切り続けた。

この時も佳代は、多喜蔵が連絡員から受け取ってきた新しい「党」の綱領を、鉄筆で原紙に刻
 んでいたのである。

新しい綱領には、「諸悪の根源は天皇制である」「天皇制をフンサイせぬかぎり、勝利は訪れな
 い」といった言葉が並んでいた。思想問題に詳しくない佳代ではあったが、五・一五事件の海軍
 士官と、「党」の考え方の違いは、天皇を打倒するかどうか、それだけではないかと思われる。

しかし彼女が、その思いを口にするのではないだろう。ただ、命ぜられたことをやっていれば
 いい。どうせ自分の意見など、誰も聞き入れてはくれない。

新聞を畳んで、再びガリ版に向かった時、玄関の戸が小さく叩かれた。

「俺だ」

大橋多喜蔵だった。格子戸を開けて出迎えると、佳代の部屋を見やり、不機嫌そうに問うた。

「ガリ版は仕上がったか？」

いえ、まだ……と答えると、それはよかった、と懐から茶封筒を取り出し、吐き出すように言った。

「綱領が書き直された。これで新しくガリ版を切ってくれ。古い原紙は焼き捨てるように」

このところ、大橋は機嫌が悪い。その理由は、幾度も綱領が訂正になり、そのつど、佳代が新しくガリ版を切り直さなければならなかったためではない。

「党」から支給される金が滞っているからだ。

それまで、連絡員を通じて多額の金が渡されてきた。それがなぜ、このところ滞りがちになったのかは分からない。食費を切り詰めざるを得なくなったが、根が裕福な商家育ちの大橋は粗食に耐えられる体質ではないらしい。何かと佳代に当り散らすようになった。

「その……」

佳代はおおずと言った。

「なんだ？」

「もう、原紙をかうお金がありません……」

「なに？」

「本当に、もうないんです」

「馬鹿な！」

大橋は大声をあげた。

「印刷は大事な任務だ！ たとえ食事を減らしても、これだけは遅らせちゃいかんのだ。一体、

何にお金を遣ってしまったんだ？」

佳代は唇を噛んで俯いた。このところ、佳代の食事は朝夕二度だけ、それも一膳に減らしている。一方の大橋は、副食が粗末になったぶん、やたらとお代わりをするようになった。酒量も増え、寝ている佳代を夜中にたたき起こして買いにいかせたこともある。

「もういい！」

大橋は足音も荒々しく、階段をあがって自室に入った。佳代は独り俯いて立ち尽くしていた。

その翌朝。

佳代が朝食を整えて、二階にある大橋の部屋の襖を開けると、籠えたにおいが鼻をついた。どうやら昨夜も、遅くまで独り酒を呑んでいたらしい。

部屋に入ると、大橋ははだけた胸を手でかきむしりながら、布団の上にあぐらをかいている。朝食の膳を置いて出て行こうとすると、「おい」と呼び止められた。

「働きに出ないか」

正座した佳代に、大橋は眼をそらしたまま言った。返事をしないまま見つめる佳代に、大橋は続けた。

「いま、多くの女性同志が、カフェで女給をやって、党のために働いている」

女給……。東京に来てからずっとハウスキーパーとしてアジトに住み、外に出るのは近所に買物するだけの佳代には、見当もつかない世界であった。

「君は昔、親の借金の肩代わりに、女郎に売られそうになったんだってな」

無言の佳代に、大橋は初めて眼を向けて言った。

「別に女郎になれって言うわけじゃない」

佳代の胸のなかに、大きな石のようなものが出来て、膨れ上がっていった。息をすることさえ苦しかった。

暗い顔で俯く佳代に、大橋は叫んだ。

「なんだ、その顔は！ 俺のために犠牲にされると言いたいのか！」

大橋は、佳代の肩を掴んで揺すぶった。

「俺はな、自分の全てを犠牲にしているんだ！ 幾百万の労働者や貧農に比べれば俺の苦しみなどものの数ではないから、身も心も、このたたかいに捧げてるんだ！ 俺には、もはや個人の生活などない！ それがお前には分かんのか！」

夏が過ぎ、風の爽やかさが秋の訪れを告げるようになった、ある日の夜。

上野にある鰻屋うなぎやの座敷で、白い洋装に身を包んだ十八歳の海老沼千恵子えびぬまちえこは身を固くして正座し、やがて現れる男を待っていた。すでに食卓には鰻重と吸い物が二つ置いてあるが、衝立つたてで仕切られた向こうに布団が敷きのべられ、枕が二つ並んでいる。鰻屋は当時、男女の逢い引きに使われることが多かった、鰻で精をつけておいて情事を楽しむという趣向である。

この物語に初めて登場した海老沼千恵子については、やがて明らかになる。襖ふすまが開き、仲居に案内されて男が入ってきた。三十路みそじ近くだろうか、結喜ゆうき紺がすりの着流しにちぢみぢみの夏羽織なつばやし、白足袋びやくたびをきちんとつけた、育ちのよさげな青年である。

「待たせちゃったね」

男は赤い唇をほころばせ、千恵子の傍らに腰をおろし、その手を握った。

「固くならなくてもいいんだよ。まずは鰻をおさがり」

千恵子の手をとったまま食卓に就かせ、向かい合って座って吸い物碗を持ち上げる。蓋を取って眼を閉じ、「いい香りだ」と甲高い声で呟く青年を、千恵子は上目遣いに窺い、震える手で自らも碗を手にした。

男のうわずったお喋りに相づちを打つうちに、やがて食事は終わった。男は立ち上がって千恵子の隣に座し、その肩を抱く。

いいんだね。そう問う男に、千恵子は小さく頷いた。男は立ち上がり、千恵子を衝立の向こうに導き、布団の上に仰向けに寝かせ、覆い被さった。その背後で、静かに襖ふすまが開いたのも気づかず。

不意に、薄暗い室内に閃光がまたたき、続いてバシヤツと濡れたタオルを叩きつけるような音が響いた。

男が身を起こして振り返ると、洋装の女が写真機を構えて立っている。

「誰だ！」

男はそう叫び、立ち上がろうとして身を固くした。男の下で仰向けに横たわっていた千恵子の膝が突き上げられ、男の股間に食い込んでいた。男は眼を見開き、嘔吐しそうな面持ちで突っ伏した。

千恵子は、重くのしかかる男のからだの下から這い出し、写真機を持つ女に飛びつき、胸に顔を埋めた。

「よくやったわ」

写真機を構えた女——猪俣佐和子は、千恵子の肩を優しく撫で、無様に両手で股間を覆い、尻を持ち上げたかたちで悶絶する男を見やりながら言った。

「大成功よ」

「わ、わたくし……」

千恵子は嗚咽を交えながら声を搾りだした。

「怖くて……とても怖くて」

「そうでしょうね……でも、ほんとうに素晴らしいわ」

佐和子は写真機を畳の上に置き、涙に濡れる千恵子の顔を覗き込むようにして言った。

「思ったとおりよ……あなたならできるはずだって、わたくし、信じていたもの」

千恵子は陶然とした面差しで佐和子を見つめ、半ば開けた唇をかすかに綻ばせた。その唇に、佐和子の唇が重ねられた。

「き、貴様ら……」

急所を蹴り上げられ動けずにいた男が、ようやく上半身を起こし、抱擁しあう女たちを睨んで叫んだ。

「なんの真似だ……」

「助けに来たのよ」

佐和子は冷やかな笑みを浮かべ、男の傍らに座った。

「わたくしの妹分が、いやらしい男に迫られて、手込めにされそうだと聞いたものですから」

「手込めだと……」

男は苦しげに言った。

「馬鹿な……俺は、紳士的に彼女を口説いたんだ。そして彼女も了解してくれたから……」

「お黙り」

佐和子の平手打ちが男の頬で炸裂した。男は恐怖に眼を見開いた。

「そんなことはどうでもいいわ。とにかく、妹分はあなたによって精神的苦痛を味わったのですからね。応分の賠償はしていただきますわよ」

「そんな無茶苦茶な……」

「あら、そう？」

佐和子は立ち上がった。

「あなたと話し合っている間も増があきそうもないわね。こうなったら、奥様と直談判させていただきますわ」

畳の上に置いた写真機を取り上げ、佐和子は言った。

「この写真を持参してね」

男の顔色が、怒りから哀願へと変わった。

「ま、待ってくれ」

男はわめいた。

「そ、それだけは……」

「奥様は、どのようにお思いになるかしら」

佐和子は冷たく笑って言った。

「あなた、婿養子なんだそうですね。いずれは義理のご両親からお店を受け継ぐはずだったのに、事もあるうに純潔な乙女を鰥屋で手込めにしようとしたことが知れたら……」

「よ、よせ」

男は立ち上がろうとして、睾丸の激痛にうずくまりつつも、身悶えして言った。

「勘弁してくれ……いったいいくら払えばいいんだ」

「そうねえ……二千元もいただこうかしら」

「二千元！」

男は蒼白になった。現在でいえば一千万円に近い。

「そ、そんな金はとでも……」

「びた一文、負けられませんよ！」

言うなり佐和子は、足をあげて男の顎を蹴り上げ、仰向けに倒れた男の股間を踵で踏みつけた。男はのけぞり、激しく痙攣した。

「明後日までに二千元……もし、持ってこなかったら、あなたの金玉、二つとも潰してあげるからね。覚悟なさい！」

その一時間後。

大森にある佐和子のアパートの洋式ベッドの上で、一糸まとわぬ姿の猪俣佐和子と海老沼千恵子が激しく抱擁しあっていた。

「佐和子さま……」

巧みな愛撫を受け、喘ぎながら千恵子が問うた。

「わたくし……決して卑劣なことをしてたわけじゃありませんよね」

「そうよ」

指先で千恵子の陰部をゆっくりと撫でつつ、佐和子は答えた。

「これは……すべて革命のためなの。プロレタリアートを解放するための、立派な革命的行為なのよ」

千恵子は嬉しげに、佐和子の乳房の谷間に顔を埋めた。

三日後。

京橋にある小さなビルディングの階段を上ってゆく猪俣佐和子の姿があった。会計事務所の看板を掲げた部屋のドアを叩くと、顔を出したのは、きちんと背広を着て眼鏡をかけた三十代半ばくらいの男だった。

「やあ、いらっしやい」

狭い事務所に入ると、壁の書棚にはぎっしりと書類の束が詰め込まれ、デスクが二つ並んでいる。その奥に、小さなソファが置いてあった。

「手塚さん、例のもの、お持ちしましたわ」

佐和子はソファに腰をおろし、向かい合って座った手塚と呼ばれる男の前に、四角く膨らんだ茶封筒を置いた。

「失敬」

手塚はそう言って茶封筒をのぞき、眼を丸くした。佐和子は涼しげに言った。
「二千円入っています」

「大戦果じゃないか」

手塚は感嘆し、封筒から札束を抜いて手早く数えて傍らの金庫に納めつつ言った。

「三沢さんから聞いたんだが、どうやら我が班がいちばん成績優秀らしい。あなたのおかげだつて、報告しておいたよ」

「ありがとうございます」

佐和子は頭を下げた。

モスクワからの送金が途絶え、それまで資金をカンパしていた学者や作家たちが一斉検挙を受けたため、「党」は極端な資金難となり、末端の黨員たちはたちまち困窮状態に陥った。

資金難を乗り切るため、「党」は、タクシーやビリヤード場経営などの事業に乗り出したが、うまくいかない。そこで中央委員の三沢は「戦闘的技術団」という新たなセクションを設けた。

「戦闘的技術団」は四つの班に分かれ、それぞれに班長がいた。手塚が班長を勤める第四班は主に女性黨員で構成され、色仕掛けで男を誘惑し、それをネタにして大金を強要する、いわゆる美人局に従事していた。

他の班も、恐喝、猥褻物の販売などの違法行為を行っていた。もともと、完全な縦割り組織で秘密主義を貫く「党」にあつては、第四班に属する佐和子も、班長の手塚も、具体的に他の班が何をやっているかを知らない。

知っているのは、「戦闘的技術団」の指揮をとる三沢一人であった。

犯罪行為以外の資金源として大きかったのは、良家の令嬢オウルゲを勧誘して入党させることだった。その際、必ず大金を持ち出させて家出させるのである。これもまた、「戦闘的技術団」の役目のひとつだった。

海老沼千恵子もそのようにして入党した一人である。佐和子は、そういう令嬢たちの「教育係」も兼ねていた。自らの浅草での経験をもとに、カフェで働かせ、男のあしらい方を学ばせる。見込みのありそうな令嬢には、男性の撃退法——すなわち辜丸を攻める技術を教えた上で、美人局をやらせるのだ。

「それはそうと、君」

手塚が笑みを収めて言った。

「もう一人、面倒を見てほしい女性黨員がいる」

「どういう女性ですか？」

「党歴は一年だったか二年だったか。これまでである同志のハウスキーパーをやっていたんだが、党のためにカフェの女給をやりたいと申し出たらしくてね。そこでまず、どこか店を斡旋あっせんしてほしいんだ」

商家の婿養子を恐喝した鰻屋もそうだったが、「党」に協力的な飲食店は少なくなかった。店主が左傾思想にかぶれている店もあれば、店主の弱みを握って協力させている場合もある。そのなかから、黨員の外貌や性格を考慮して店を選ぶのもまた、佐和子の役目だった。

「もし、見込みがあるようだったら、君の配下にしてもいい。そのあたりの判断は任せる」
「分かりましたわ」

佐和子は頷いた。任せる。そう言われることが、無上の喜びだった。

その三日後。

猪俣佐和子は独り、例の鰻屋の座敷に座っていた。

失敬な連中ね……。

佐和子は腕時計に眼をやりながら呟いた。女給になりたいと申し出た女性党員は、同居中の男性党員とともに十二時には現れるはずだった。しかし一時近くなっても一向に姿を見せない。

襖が開いて女将が入ってきた。

「まだお見えじゃないんですか？」

四十前の女将は若い男性党員を愛人にしていた。その縁で佐和子の仕事に協力している。美人局の場を提供するだけでなく、長年水商売をしていた経験から、女性党員の目利きも頼んでいる。

「ええ、そうなのよ」

佐和子は舌打ちして言った。党内の序列でいえば、佐和子のほうが数段上なのだ。それなのに、一時間近くも待たせるとは何事だろう。

ふと外で、客を迎える仲居たちの声や、慌ただしげな足音が響き、やがて襖ががらりと開けられた。

現れたのは三十半ばの、痩せてロイド眼鏡をかけ、袖の擦り切れた背広姿の男だった。その後、小柄な少女の姿があった。髪を三つ編みにし、すり切れて寸法の合わなくなった粗末な和服から、すねが半ば覗いている。

「遅くなって申し訳ありません」

男は腰をかがめて部屋に入り、しきりと手をついて謝った。それから背後の少女に、さあ、お前もお入り、と声をかける。少女は顔をそむけたまま凍ったように突っ立っている。早くしないか。男が声を荒げると、俯いたままゆっくりと入ってきた。

その少女を見て、佐和子は眼を見開いた。

確か、小沼健吾の家にいたハウスキーパー……。名前は、佳代と言ったっけ。

それだけならば、さほど驚愕には値しない。ある党員のハウスキーパーだった女性が、さまざま理由で、別の党員のハウスキーパーを務めることは珍しくはない。

佐和子を驚かせたのは、佳代の頬がくつきりと赤い腫れが痛々しく刻まれていることだった。明らかに、誰かに殴られた痕だ。殴ったのが、目の前で卑屈に背を丸めているロイド眼鏡の男であることもまた、明らかだった。そして、女給になりたいという申し出が、佳代の意思でないことも。

さらに見れば、襟元から痣が覗いていた。暴力を振るわれたのは一度や二度ではないらしい。

「お座りなさい」

佐和子は面差しを繕って佳代に声をかけた。

「この鰻重はとてもおいしいのよ」

佳代は俯いたまま動こうともしない。佐和子は女将を見やり、さっそくお運びして、と声をかけた。女将が座敷を出たのを確かめてから、佐和子はロイド眼鏡の男に向かって言った。

「大橋多喜蔵さんでしたわね」

「はい」

「あなたはもう結構です。このままお帰りなさい」

蛙のように畳に手をついたままの姿勢で、大橋は眼を見開き硬直した。

「あなたに御用はありません」

狼狽える大橋に、佐和子は冷たく言い放った。そうですか……。大橋は俯いて不満げに呟いて立ち上がり、「家で待ってるからな」と佳代に声をかけて去ろうとしたが、佐和子の「お待ちなさい」の声に立ち止まった。

佐和子は座ったまま、大橋を見上げていった。

「彼女は、もうあなたの家には戻りません」

再び愕然とする大橋に、佐和子は言った。

「後で連絡員をよこしますので、彼女の持ち物すべて渡してください」

「し、しかし……」

大橋は佐和子の向かいに正座して詰め寄った。

「それじゃあ私が困るのです」

「何が困るんですか？」

佐和子は大橋を見据えて言った。

「まさか、彼女が女給として稼ぐお金を、全部自分の懐に入れてしまおうという算段だったわけではないでしょうね？」

凶星だった。党员となり、地下に潜って以来、大橋は党からの援助に頼りっぱなしでろくに小

説も書かないでいた。佳代がいなくなってしまうたら、現在の乏しい党からの援助では生活していくこともできない。

言い返せずに俯く大橋に、佐和子は追い討ちをかけた。

「あなたも党员ならば、ご自身で汗を流すことを考えるべきですわ」

大橋はむっとして佐和子を睨みつけ、しばらく唇を噛んでいたが、やがて立ち上がり、口を開いた。

「あなた、最初からこのつもりだったのか？」

「最初から？」

「はなっから、俺のハウスキーパーを横取りして働かせ、自分の実入りみいりにするつもりだったんじゃないのか？」

「おっしゃっている意味が分かりません」

「冗談じゃない……中央委員でもないあなたが、なぜ、勝手に党员の配置換えをやるんだ。越権行為じゃないか！」

握り締めた拳を振るわせる大滝に、佐和子は静かに立ち上がり、すっと近寄った。

「彼女の処遇は、党からわたくしに一任されております」

佐和子がそう言うと同時に、大滝は総身を強張らせた。佐和子の右手が、大橋の股間に伸びていた。ズボン越しに睾丸を掴まれ、反射的に身動きができなくなったのだ。さらに佐和子は、大橋の耳元に唇を寄せて囁いた。

「これ以上、反抗的な態度を取るようでしたら、二つとも潰しますわよ」

大橋の顔が恐怖で引きつった。佐和子は続けた。
「ふざけて言っているではありませんよ。この手で使えなくなった睾丸は、十個や二十個じゃないのですから」

ガラスのように硬く鋭い物言いには、大橋の全身が細かく震え始めた。嘘ではなかった。戦闘的技術団に配属されて以来、佐和子は、美人局をはじめ危ない橋をたくさん渡ってきた。その過程で少なくない数の男を去勢してきたのだ。

「このまま静かに、お引き取り願えますかね」

言うと同時に、佐和子は親指の爪を睾丸に食い込ませた。からだを貫く鋭い痛みには、大橋は喉の奥で悲鳴をあげ、幾度も首を縦に振った。

大橋の股間から手を離し、佐和子は、棒立ちで成り行きを見守っていた佳代に歩み寄り、その手をとって座らせた。

「大丈夫よ。もうこれからは、誰からも叩かれずにすむわ」

佳代は、口を噤んだまま、豊に視線を落としている。佐和子は、痛々しげに佳代の固い面差しを見つめていたが、ふと、右手で痛む股間を押さえ、左手で壁にすがって辛うじて立っている大橋に眼をやり、叫んだ。

「いつまでそこにいるんです。早々に立ち去りなさい！」

大橋は歩き出そうとしたが、苦痛のあまり足が動かない。苛立った佐和子は、大橋の背後に歩み寄り、股間を蹴り上げた。両手で股間を押さえてつんのめった大橋の尻を蹴って、廊下に追い出し、女将を呼んだ。

「この男をつまみ出して！」

「ほう、それで大橋君はなんて言ってるんです？」

こんなに足腰の軽い「中央委員」には初めてお目にかかった……。ソファに座って足を組み、煙草をふかしながら喋る三沢に、手塚はふと思った。

銀行に勤めた経験もあり、三十歳をすぎたから「党员」となった手塚にとって、若い幹部たちの世間離れた横柄な態度は、神経に障るものがあった。大学を出たの「中央委員」たちと会談する時は、格下である手塚が外向くのが常であったが、三沢は用事があれば自ら出てくる。この日も、会計事務所の看板を掲げる手塚のアジトまで、自ら足を運んでやってきた。言葉遣いも、年上である手塚には丁寧である。

「大橋君は、それどころじゃないようです」

手塚は言った。

「まだ血尿が止まらず、床に伏せたままだとか。当分、仕事は出来なそうですからね」

「なるほど、大変な目にあったわけだ」

興味深そうに三沢は頷いた。

「女給として稼がせようとしたハウスキーパーは取られ、挙げ句の果てに大事な所を潰されかけた。踏んだり蹴ったりですな」

「しかし、アジ・プロ部からは正式に抗議されたんですよ」

手塚は真顔で言った。アジ・プロ部とは、思想宣伝を担当するセクションであり、大橋のよう

な作家や学者出身の党員が所属している。三沢と同格の中央委員が直轄している、党でも重要な部署だ。

「井上君を査問にかけると言っている者もいるらしい」

井上とは、言うまでもなく猪俣佐和子の変名である。顔を響めて手塚は続けた。

「正直、彼女のやり方は強引だし、男として許し難くもある……でも、井上君はわが第四班の稼ぎ頭ですからね」

「まあ、いざとなったら男の股ぐらを蹴り上げて倒すくらいの女性のほうが頼りになります」

三沢は、笑みを保ったまま言った。

「アジ・プロのほうは、僕が宥めておきましょう。だいたい大橋君は、入党以来、ろくに小説も書かず、働きの悪かったようだ。代わりのハウスキーパーをあてがうかわりに、ちゃんと執筆活動をするよう、叱咤しておきます。それよりも……」

三沢は声を低めた。

「そろそろ、例の計画に取りかかってほしいのですがね」

手塚は背筋を伸ばした。三沢は、鞆から新聞紙に包んだものを取り出し、テーブルに置いた。重い金属の響きがかすかに聞こえた。

「とりあえず一挺、用意しました。一挺で足りなければ、言ってください」

喉仏を鳴らして唾を呑み込み、新聞紙にくるまった拳銃を見つめていた手塚は、ゆっくりとうなずいた。三沢は微笑み、では、これで失敬、と立ち上がった。

磨けば光るとは、このことか……。

美容院から恥ずかしそうに出てきた佳代の姿に、佐和子は思わず見とれた。

佐和子が、強引なたちで佳代を大橋多喜蔵のもとから引き抜いてから三日後の日曜日。佐和子は佳代を銀座に連れ出した。三越百貨店で鮮やかな花柄の銘仙をあつらえ、さらに美容院に向かい、三つ編みにしていた髪をほどいてパーマネットを当てさせた。

佳代は、もともと色白で、眼が大きく、唇は小さいがふっくらとしている。かつての貧しい身なりや、ろくに櫛も当てられていない髪で隠されていた美しさが、艶やかな衣装と理容によって輝くばかりに現れ出たのだ。

「きれいよ、佳代ちゃん」

そう声をかけ、肩をぽんと叩く。佳代は俯き、恥じらったような笑みを浮かべた。鰻屋から連れ出して以来、初めて見せた笑顔だった。

本当に無口な娘ね……。

いま、佐和子は佳代を自分のアパートに住まわせている。戦鬨的技術団に参加して以来、外での活動の多くなった佐和子に変わって、掃除や炊事などいっさいをてきぱきやってくれるのだが、何を話しかけても「はい」か「いいえ」だけで、ちよつと複雑な問いを投げかけると、小首を傾げて黙ってしまう。

馬鹿なのかしら。そう疑ったこともあったが、昨日、大橋の家から佳代の荷物が届けられると、粗末な衣装や下着やガリ版刷りの機械とともに、社会主義の理論書が二冊ほど混じっていた。ところどころ鉛筆で線まで入っている。ちゃんと勉強しているのね、と言ってみたが、やはり

恥じらって俯くばかりだった。褒められることに慣れていないようだった。

このままでは夜の商売に出すどころか、戦鬪的技術団のメンバーとして役には立たない。身なりを変えれば、少しは心を開いてくれるかもしれない。そう願って銀座に連れ出したのだった。

「お腹が減ったわね」

服部時計店の時計台が十二時近くを指していた。

「資生堂で、おいしいものを食べましょう」

資生堂パーラーの創業は明治三十五年だが、今の建物は昭和三年に新築された。店に入ると左右に階段があり、吹き抜けの天井にはシャンデリアが下がっている。階段をあがると、オーケストラボックスまでついている二階席。

すでに店は満員に近かった。給仕に案内されて席に座り、名物のカリーライスを注文する。

物珍しげにきよろきよろと見回していた佳代は、運ばれてきた銀の器に入ったルーと、白い皿に盛ったご飯に、途方に暮れた表情を浮かべた。

「初めて？」

と問うと、こくりと頷く。箸を使わない料理は食べたことがないようだ。スプーンの持ち方から指導してやると、ルーをかけたご飯をひとくち、口に含んで妙な顔をしている。

「これよりも贅沢なものを、毎日のように食べている人もいるのよ」

佐和子は声を潜めて言った。佳代は、小鳥のように眼をぱちくりさせて、佐和子を見つめる。佐和子は続けた。

「わたくしたちがやっているのは、贅沢にうつつを抜かし、人民の貧苦を顧みないブルジョワ連

中からお金をいただいて、やがて来るたたかひの日に備えることなの」

瞬きもせず無言のままの佳代の手を、佐和子は握った。

「わたくしの仕事を手伝っていただけ？」

佳代は眼を逸らし、小首を傾げた。戸惑っているようにも見え、佐和子の言葉の意味を呑み込めず考えているようでもあり、たんにいつもの癖のようでもあった。佐和子は微笑み、やわらかな声で言った。

「まあ、いいわ。何をやっていただくかは、おいおい説明するわね」

カリーライスを口に運ぶ佐和子に、ちらりと視線を戻した佳代は、別のことを考えていた。

「党」の資金繰りが苦しく、多くの党員が貧しさに喘いでいることは、佳代も耳にしていた。それなのに何故、この女は、敵であるはずの「ブルジョワ連中」と同じ、高い料理を楽しんでいるのだろうか……。

食事を終え、通りに出た。昼休みとあって、通りはサラリイマンや、会社勤めの女性タイピスト、豪奢なお召しで身を飾る毎日が休日の奥様たちで溢れている。

「天下の民衆が苦しんでというのに、不正に懐を肥やし、ぬくぬくと贅沢三昧とは、それでもあんな、大日本帝国の臣民かい！」

不意の金切り声に、通りを歩くひとびとの眼が、そちらに向けられた。

見れば、銀座でもっとも有名な宝石店の店先で、若い娘が、蝶ネクタイに髭をはやした支配人らしい男を相手に怒鳴っていた。

背丈は四尺三寸（一四〇センチ）ほどか。小柄だが、よく響く大声の持ち主だった。髪を三つ編みのおさげにして、皺だらけの白いブラウスに、短い黒のスカート。まるで小学生のような出で立ちだったが、色黒で、眉毛の太いくっきりした顔立ちは、二十歳くらいだろうか。手にした太いステッキを振り回して支配人を威嚇する彼女の周りには、同じような貧しい身なりの少女たちが三人、寄り添うように立っている。

君、あんまり、騒ぐと警察を呼ぶよ、と支配人は苦笑しながら宥めるように言う。その爪先に、ステッキの底を打ち込み、悲鳴をあげてしゃがみこむ支配人に、娘は居丈高に言った。

「あたいを誰だと思ってるんだい。金沢文子だよ！」

苦悶の面差しで眼に涙を浮かべて文子を見上げていた支配人の顔色が変わった。ちよ、ちよとお待ちを……。震える唇でそう言いつつ、店内に消えた。数分して戻ってくると、今日はこれでお引き取りを、と打って変わった態度で封筒を差し出す。

娘は封筒の中身をのぞきこみ、地面に叩きつけた。

「ちよっと、あんた！ あたいを侮辱する気かい。アカのリヤク、かなんかと間違えてるんじゃないだろうね！」

リヤクとは「略奪」の意である。もともとは無政府主義者や社会主義者が、ブルジョアが庶民から搾取した金を「略奪」するという口実のもとに、雑誌広告料などの名目で金を強要することを指す。

娘は、三人の少女を両脇に抱え、なおも言い募った。

「あたいたちは、かわいそうな孤児の救済のために、日々活動している天下の俠者だよ。この娘

たちを見な。特権階級の金の亡者どもの犠牲者さ。この娘たちがちゃんとした教育を受けられるよう、篤志を願ってきたというのに、なにさ、五円や十円の金で追い返そうなんて不届き千万。金玉蹴り潰してやるから、覚悟しな！」

その言葉に、見物していたサラリイマンたちはあつけにとられ、奥様方は顔を曇めつつも忍び笑いを抑えられず、支配人は思わず、両手で股間を隠しかけ、慌てて威厳をただす。

と、とりあえず中へ。腰を低くして懇願する支配人を押しつけ、金沢文子と名乗る娘はふんぞりかえって店の中に入った。支配人はおろおろと後を追った。

見物の輪が解けていくなか、佳代は眼を丸くし、半ば唇を開けて見入っていた。

「佳代ちゃん」

汚いものを見るような眼つきで眺めていた佐和子が、佳代の袖を引いて歩き出した。佳代は弾かれたように後に続く。

佳代ちゃん……？

その言葉に、立ち止まって騒ぎを見ていた男が、行き交う人波のなかへ歩み去る佳代の背中に眼をやった。

小沼健吾であった。

高価そうな銘仙に絹の羽織を着たその女が、かつて小沼のハウスキーパーをしていた佳代であるはずがない。しかし……。 「佳代ちゃん」、そう言った女の声には聞き覚えがある。

「峰岸」

小沼は、並んで立っていた若い男に声をかけた。同じ国家主義団体に所属する青年である。

「あの二人を追ってくれ」

訝しげにな表情の峰岸に、小沼は言った。

「住んでいる家突き止めてくれればいい」

「どっちのですか？」

二人の女は、同じような背格好をしていた。後ろ姿だけでは、どちらが佳代か、分からない。

「どちらでもいい、気づかれるな」

首を傾げつつ、峰岸は女たちの後を追った。小沼は、宝石店を見つめたまま立ち続けた。

三十分後。金沢文子は支配人に見送られ、ほくほく顔で店から出てきた。道端にしゃがみこんで待っていた三人の少女が駆け寄ってくる。

「待たせたね」

文子は、ぶあつく膨らんだ封筒を左手でかざし、右手で少女たち一人ひとりの頭を撫でながら言った。

「大漁だよ。お汁粉でも食いにいくかい？」

少女たちが歓声をあげ、文子は、ぺこぺこ頭を下げる支配人に手を振って歩き出した。小沼はその後を追って走り出し、ちよつと、と声をかけた。

「なんだい？」

文子は足をとめ、不審そうに長身の小沼を見上げた。

「金沢文子さんだね。安藤さんのところの」

「そうだけど……？」

「安藤さんに会いたいんだ。案内してくれないかね」

無言で、頭から足の爪先まで、値踏みするように小沼を見つめていた文子は、不意に手を伸ばし、小沼の股間をつかんだ。強くひねりあげられ、激痛に小沼の全身は硬直した。

「誰だよ、あんた」

じわじわと睾丸に加えられる圧迫に、返事どころか息をすることもできなかった。それを察した文子が、いくぶん手の力をやわらげる。やっと息を吐き出した小沼は、しわがれ声で言った。

「あ……怪しい者じゃない」

「怪しくねえやつが、なんで安藤なんかに会いたいのさ！」

低い声で問われ、小沼の唇の端に思わず苦笑した。確かに、俺は「怪しいやつ」だ。

「……そうだな」

声を振り絞り、小沼は言った。

「俺は怪しいやつだ。だから、安藤さんに会いたい……」

文子は笑い出した。

「勝手にしてくるのはかまわないけどサ……」

小沼の股間から手を離して、こう付け加えた。

「生きて帰れるかどうかは、保証の限りじゃないよ」